

文化探訪 その3

ひろせ ななこおり ～「広瀬斜子織」を尋ねて狭山市立博物館へ～

「広瀬斜子織」をご存知でしょうか？狭山市立博物館には広瀬斜子織という絹織物が数点所蔵されており、常設展示室には黒紋付きの羽織と白生地 of 反物が展示されている。博物館は33年前（1991年）の開館で、屋根は「お茶畑」を、外壁の模様は「広瀬斜子織」をテーマとしたデザインとなっている。



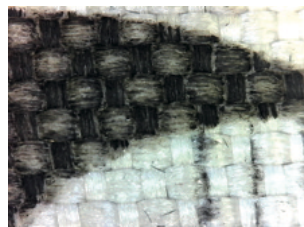
狭山市立博物館

展示室で狭山ナビーズというボランティアガイドさんの説明をきいた。この地域では、江戸時代から蚕を飼ひ絹織物の生産がおこなわれていた。宝永2年（1705年）川越藩主となった秋元喬知（たかとも）が、甲斐国から職人を連れてきて「川越平」（かわごえひら）を織らせた。それが周辺地域にも伝わり狭山地方では斜子織に育って行ったと考えられている。それを川越商人が買い集め「川越斜子」の名で江戸に売っていた。



そういう事情は清水宗徳の「ななこ織の碑文」（広瀬神社）に出ている。明治10年（1877年）当時の埼玉県令白根多助が広瀬にきて、宗徳から「広瀬斜子織」の由来を聞いて感動し、「ななこおり広瀬の浪のあやなるを誰川越の名に流しけん」と歌って土地の人々を励ました。人々は宗徳の提唱で「広瀬組」をつくり、品質の向上に努めたということである。広瀬組の商標にはこの和歌が書かれている。

斜子織は各地にあるが、当地のものは博覧会・共進会で何度も賞を得ており、宮内省の御用品にもなった。当地の斜子織は「白ナナコ」と言われたように、白の無地であり、厚地でしっかりした織りだった。当時、男性の晴れ着は紋付きの羽織・袴だったが、その羽織はナナコだった。また、女性用の帯としても使われていた。



斜子織黒紋付 拡大写真

説明を聞いた後、会議室で博物館所蔵の斜子織7点を見せて頂いた。拡大鏡で織り目を見ると緯糸が太くぷっくり膨らんでみえた。魚卵のように見え、斜めに並んで見えることから、ナナコは魚子とも、斜子とも書くようだ。

狭山市では狭山遊糸会という市民グループが、10年前から広瀬斜子織の再現に取り組んできた。今では織る人もいなくなり、その技術は継承されておらず、過去の人々の織りが残っているだけである。



狭山遊糸会が修復した絹機

残された現物の分析と過去の資料から「広瀬斜子織」の糸や織り方などを解明し、再現できるようになってきた。経糸（たていと）は細い糸を2本引き揃えて使い、緯糸（よこいと）は太く撚りの無い1本の糸を使っている。当時はすでに高機（たかばた）が使われていた。狭山遊糸会では市内を探したが織り機は見つけれず、唯一博物館の収蔵庫に壊れた絹機（きぬばた）と考えられる織り機が残されていたので、それを使って再現にたどりついた。

150年ほど前の狭山市ではそれぞれの農家でこの織物が織られ、明治26年（1893年）にアメリカで開催されたコロンビア博覧会でもメダルをもらっていた事実などは驚きであった。日本の絹文化が廃れつつある現状の中で、当時の人々の優れた技術とその努力・工夫は、現在の狭山市民が受け継ぎ、将来に伝えていくべき貴重な文化遺産だと心に刻んだ。

文責 野本 照子